

1. 「アラン・ディルケンス教授」講演会、研究会

1. 名古屋大学 GCOE 研究会

日程：2009年2月23日（火）14時から

場所：名古屋大学文学研究科大会議室

テーマ「キルデリクスとクロヴィス ―歴史叙述、考古学、文書作成―」

"Childeric (†481) et Clovis (†511). Histoire, archéologie et production de documents écrits"

2. 「東アジア文書論」共催研究会

日程：2009年2月28日（土）13時30分から

場所：九州大学箱崎文系キャンパス共同演習室

テーマ「カロリング期の司教カピトゥラリア ―その性格、射程、伝播―」

"Les capitulaires épiscopaux carolingiens : nature, portée et diffusion"

3. 西欧中世史料論研究会

日程：2009年3月1日（日）10時から

場所：九州大学文学部西洋史学研究室

テーマ：2月23日名大研究会と同じ

平成20年度の活動において、ベルギー自由大学教授のアラン・ディルケンス Alain DIERKENS 教授を迎えての連続研究会を開催した。名古屋大学での講演会は、同大学文学研究科（当時）の佐藤彰一教授、同加納修准教授のご厚意で実現した。2月28日の研究会は、九州大学人文科学研究院の坂上康俊教授が主宰される共同研究「前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較史的研究所」との共催で開催された。佐藤教授、加納准教授、坂上教授には、この場をかりて、あらためて厚く御礼申し上げる。

講演者のアラン・ディルケンス教授は、1953年お生まれの56歳で、現在ブリュッセル自由大学中世史担当教授、さらには、同大学中世史研究ユニットの所長をお務めで、名実ともに、ベルギーにおける中世史研究、教育の中心人物の1人である。年若くして、ベルギー学界の輝ける星として将来を嘱望され、その後もその期待に違わないご活躍を、ヨーロッパ学界をまたにかけて続けておられる。ディルケンス教授は、ベルギーを代表する総合大学の一つであるブリュッセル自由大学で、歴史学と考古学を学ばれ、1983年に、ジョルジュ・デスピ教授の指導下で、中世初期の農村におけるキリスト教化と修道院をテーマに博士論文をまとめられた (*Abbayes et chapitres entre Sambre et Meuse (VIIe-XIe siècles). Contribution à l'histoire religieuse des campagnes du Haut Moyen Âge. Préface de Georges Despy. Sigmaringen, Jan Thorbecke Verlag, 1985*、として出版された)。1982年より母校で教鞭をとられ、1993年より現職である。教授のご関心の中心は、中世初期を対象とする政治史、宗教史にあるが、史料学や考古学に関する造詣も深く、関与される共同研究も多様なテーマに及ぶ。

今回の連続講演会、研究会は、ディルケンス教授の年来の関心領域から、特に日本の研究者の関心を引くと思われる二つのテーマについてお話しいただくよう、お願いするかたちで設定された。

一つは、カロリング期の司教カピチュラリアをめぐる議論の再論である。ディルケンス教授は、「ルイ敬虔帝治下の帝国における農村のキリスト教化」と題する1990年の論文で、今回と同じリージュ司教の司教カピチュラリアを検討されたことがある。今回は、坂上康俊教授が主催される東アジア文書論プロジェクトとの共催研究会として、あらためてカロリング期の文書実践や、教会と国制の問題にアプローチされた。実務系史料の実質的機能や理念的な性格への関心の高まりは、西欧のみならず日本でも感じられるが、史上まれにみる辺境地域のイデオロギー王権であったカロリング国家の諸問題は、中華政治秩序の衛星国家の一つとしての日本国家を理解するためにも、有効な比較や参照軸となることが期待された。

いま一つのテーマは、いわゆるポスト＝ローマ期のゲルマン人王権の性格に関してである。ポスト＝ローマ期の王権について、文献史料のみならず、発掘や印章等の考古学史料をも用いながら、学界の最新の成果をまとめあげるさまは、まさに大家の講演と感じられる。ポスト＝ローマという表現に、単にロマニスト的観点の優越にとどまらない射程があるのは、ヨーロッパ文明を、たとえば、一方では中近東や北アフリカ、他方ではブリテン諸島とイベリア半島との比較を通じ再定義する視点と方法が備わっているためであろう。今回のディルケンス教授の報告は、ユーラシア大陸の極西に形成されたフランク人の王権を、「世界に冠たる西欧文明の起源」としてではなく、一つの歴史的現象として解釈する方法を提示してくれる。同時期に極東の地に誕生したもう一つの野蛮な王権との比較へも誘われる。マコーミックやウィッカム、佐藤教授をはじめとする諸研究によって、我が国でも認識が高まっている領域において、研究のさらなる展望を開くものであるとともに、大国のはざまにあって、独特な貢献を続けてきたベルギー中世史学の最良の雰囲気味わっていただきたい。

本報告書では、事前に準備された講演原稿をそのまま掲載するとともに、九州大学での質疑討論の様子を含めた報告からなるコメントを準備した。

最後に、ご多忙のさなか、こころよく今回の招聘をお受け入れいただいたディルケンス教授に、あらためて感謝申し上げます。教授は、滞在の期間を通じて、若い世代を含む多くの日本人研究者との交流に積極的に務められたほか、講演会、研究会の質疑の場においても、終止、慎重ななかにも、誠実なご対応で一貫された。